

6年 国語科学習指導案

授業者 青山 千秋

1. 単元名 「わたしを彩る言葉」（『注文の多い料理店』『雨ニモマケズ』 作・宮沢賢治）

2. 単元の目標

○『注文の多い料理店』の追究テーマを考え読み深めることで、宮沢賢治が作品に込めた思いにふれて自分の考えを広げたり、文学や詩の表現から自分を支える言葉を見つけたりして読書の意義を強く実感する。
〔知識及び技能 (3) オ〕

○『注文の多い料理店』をそれぞれの追究テーマで読み味わった友達と作品のおもしろさを語り合うことで、感じ方の違いに気付いたり解釈の深まりを実感したりする。

〔思考力、判断力、表現力等 C (1) カ〕

○テーマをもって物語を追究する中で、再読したり他者と交流したりして解釈が深まるよさを実感し、これからの読書生活に生かそうとする。
〔学びに向かう力、人間性等〕

3. 子どもと教材

本学級の子どもには、話し合いの場において、出された意見に対して感情論で否定することはなく、他者を受け入れようとする受容的な土壌がある。一方で、もっと自分の思いを主張してよいのではないかと感じることもある。それぞれがもつ意見の間に存在するであろう齟齬を解消しようとする思いが薄かったり、自分ではない学級の誰かに物事の決定権を委ねることに慣れてしまっていたりするのではないだろうか。その子の中にある思いも等しく大切にしたい。

運動会における綱引きのチーム分けをする際、初めに実行委員が案を提示した。それに対して「何でそのメンバーなの？」と意図を問う質問や「男子と女子の人数は均等にしたらどう？」という男女比に関する意見などはありつつも「実行委員が考えて決めてくれたのなら、それがいいと思う」という意見によって話し合いが五分あまりで終了したことがあった。実行委員への信頼や新たな学級の仲間への遠慮もあると思うが、議論を重ねて学級としてよりよい意見にしていこうとする姿はなく「みんなの考えが完全に一致することはないからね」と呟いた子どもの言葉に、ある種の「諦め」ともいえる思いがあるのではないかと感じた。

授業においては、思いを重ねることの楽しさに目を向け始めている子どもの姿があった。四月に実践した国語科『帰り道』において、ある子が「活発な周也は『からあげ』で、静かな律は『マヨネーズ』だと思う」と解釈した場面があった。それを聞いた学級の多くの子どもは「どういうこと？」「意味が分からない」と、発言の真意を尋ねていた。そのような反応に対し、その子は『唐揚げ』は一人でも十分美味しいけど『マヨネーズ』をかけるともっと美味しくなるよね。周也と律も同じ関係だと思う。活発な周也に、物静かな律がいれば、よりいい関係だってこと」と解釈の意図を説明した。「なるほど」と納得の声が多く聞かれ「それって『サラダ』と『ドレッシング』の関係ってこと？」「『パン』と『バター』ってことでいいよね？」と自身の言語感覚に近い言葉を繋いで解釈をしていった。このように友達の解釈を認め合えるからこそ、話題を繋ぎ、議論を展開することができる。授業後の振り返りでは「自分の考えを発表したりみんなの考えを聞いたりして楽しかった」「自分は食べ物に例える考えは無かったから聞けて良かった」と思いを重ねることの楽しさに目を向け始める子どもの姿があった。

一方で、表面的なおもしろさによって議論そのものが目的化し、議論が生じた意義へと迫ることができないこともある。自身がもともと持っていた解釈が蔑ろにされ、根拠となる叙述から離れてしまい、【人物像】に迫り切れなかったという実態もある。より叙述を根拠にした読みを展開してほしいと願っ

ている。私が本学級の子どもに願うのは、受容的な土壌を大切にしつつも目先のおもしろさに捉われることなく、自分と他者の解釈の共通点や相違点を踏まえた上で本質から目を逸らさず議論を展開し、集団の一人であるという責任をもちながら追究し続けていく姿である。時に他者とぶつかり合ったり答えを見出せずに迷ったりすることで痛みを伴うことも考えられる。しかし、そのような過程を通して、それぞれの解釈にある重なり気付いた時、集団が納得できるような解釈を創造したり、互いの解釈の価値を一層高めたりすることができるだろう。予測不可能な社会を生きていくであろう子どもだからこそ、学校という場でこのような経験をするに価値がある。

本実践では、『注文の多い料理店』（作・宮沢賢治 画・佐藤国男 子どもの未来社）を扱う。この物語は宮沢賢治の生前に出版された唯一のものであり、現行の小学校五年生の教科書にも採択されている。本作品は多様な【読みの視点】から解釈することができる。自己中心的な発言を繰り返す特徴的な【登場人物】。「風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。」は、不思議な世界へ誘う合図となるファンタジー作品の【構造】。更に、紳士は店からの注文を来客に対する「オーダー」と捉えていたが、扉を開けていくごとに実は自分たちが食べられる側として扱われていることに気付いていくという【展開】。また『注文の多い料理店』単体で行っていた解釈に宮沢賢治という【作者】の視点を取り入れることで、物語への解釈が変容する経験を期待している。同時に『雨ニモマケズ』を単元中で扱うことによって『注文の多い料理店』には宮沢賢治の「自然との共生」「人のあるべき姿」などの理想が込められていることに目を向けられるだろう。「おもしろかった」「不気味だった」など、一読しただけの表面的な解釈に留まらず、上記以外にも様々な【読みの視点】を意識しながら、叙述を根拠に読み進め、語り合うことで物語の世界観を豊かに想像していくその過程は、本質から目を逸らさず追究していく姿といえよう。

国語科における学びの営み、即ち、言葉と出会い、解釈し、他者と語り合い、言語感覚を磨くというサイクル。目の前の子どもは今、新たな学級で新たな仲間とこのサイクルを回さんと、懸命にもがいている。仲間と学ぶ過程そのものとそこから紡ぎ出す解釈の積み重ねが、その子の言語感覚をより豊かなものに、ひいては一人ひとりの豊かな人生の創生に寄与していくことを願ってやまない。

4. 本単元に願う『その子らしく学ぶ』

第①時に子どもは、詩『雨ニモマケズ』（作・宮沢賢治）に出合う。漢字とカタカナだけで構成された文体によって読みづらさを感じることも予想されるが、多くの子どもは「宮沢賢治の理想の生き方を表現している詩」と解釈するだろう。それに対して「賢治はどんな理想をもっているか」と問うことで、詩を精読する機会とし、賢治の理想を子どもが具体的に想像できるようにしていきたい。このやり取りを通して「本当に欲がないね」「他人のために努力できる人だったんだなあ」と宮沢賢治像をつくりあげていくだろう。授業の最後に、次の時間に他の宮沢賢治の作品をもってくることを予告し、子どもが期待感をもてるようにする。第②時、子どもは『注文の多い料理店』に出合う。単元を通して子どもが物語に対する解釈の変容を体感できることを願い、初読の読後感を書き記しておく時間を確保する。物語のおもしろさや不思議な世界の難解さを感じた子どもは、他者と語り合いたいという欲求を覚え、自由に解釈を交流しながら、この物語の大体をつかんでいこうとするだろう。第③時は、前時の交流の続きから始める。ある子は「二人の紳士ってすごく嫌な感じがするよね」と【人物像】に、またある子は「何で二人の紳士の顔は元に戻らないんだろう」という【結末】に対して解釈をするだろう。他にもファンタジー作品の【構造】や物語の【展開】など様々な【読みの視点】を通して伝わってくる作品の魅力や疑問についてももっと考えを深め、共有する楽しさを実感できるように「それぞれの追究テーマで『注文の多い料理店』を読み味わおう」という単元の見通しを子どもと共有する。

単元中盤では、思う存分に追究できるような環境を保障することで、それぞれが設定したテーマに対して納得のいくまで読み、おもしろさや分からなさを追究していく。その際、それぞれが他者の追究テーマを踏まえて交流できるように机上にカードを設置する。二人の紳士に着目し【人物像】を明らかにしようとする子は「二千四百円の損害だ」という発言から「拝金主義」的な側面を、山猫からの注文を

都合よく捉える【言動】から「ご都合主義」的な側面を読み取っていくだろう。また「何で顔のしわくちゃが元に戻らないんだろう」と【結末】に着目した子は、紳士の顔がしわくちゃになった理由とともにそこに内在する宮沢賢治のメッセージの存在にまで目を向け始めるだろう。時に自分で設定した追究テーマであっても、行き詰まり立ち止まってしまうこともあるだろう。そのような時に、今一度自身のプロセスを振り返り「どこで迷い始めたのか」と考えたり、友達のカードに目を向けるように促したりして「学級の仲間はどうような解釈をしているのか」とかかわることを通して自身の現在地をつかみ、再び歩みはじめる姿を願っている。その後、それぞれの追究テーマに対する解釈を全体で共有していく。

【人物像】に関する追究テーマを設定した子は「二人の紳士は『雨ニモマケズ』に描かれている賢治の理想とは全然違う！お金とか地位ばかりに目がいつているんだと思うよ。お金第一！みたいな感じがする」と解釈するだろう。また【結末】に関する追究テーマを設定した子は「二人の顔が元に戻らなかったのは当然のことだと思うよ。だってそれだけ怖い思いをしたんだもん。でも、それ以外にも宮沢賢治の思いが隠されているのかも」と解釈するだろう。多様な【読みの視点】で『注文の多い料理店』を語り合う中で、自然に議論の中心が「作品に宮沢賢治がこめた思い」に収斂されていくだろう。そして、最終時で「宮沢賢治は『注文の多い料理店』で何を伝えたかったのだろう」について議論していく。例えば「賢治の理想とする人間の姿だと思う。見た目や金のことばかりに目を向けるんじゃないで、自然や命を大切にすることの価値を『注文の多い料理店』に込めたんだと思う。そして、宮沢賢治のように信念を大事にして生きる姿を自分も見習いたいな」という解釈は『注文の多い料理店』だけを読んでいては辿り着くことはできない。これは、賢治の人間性にふれることで紡ぎ出される解釈といえよう。

自分の関心に即した追究テーマを設定し、自走する学びを展開することによるおもしろさや難しさを通して、言葉の背景にある思いを知ったり、解釈の変容を実感したりした経験が、正解のない社会を生きていくであろう子どもにとって、自分らしさを発揮しながら答えを紡ぎ出していくための一助になることを願ってやまない。

5. 単元構想（全8時間扱い／本時は第⑦時）

＜教師の投げかけ＞ 子どもの表れ 最終時における子どもの表れ ○教師の働きかけ

①＜『雨ニモマケズ』という詩を持ってきたよ＞

- ・本で読んだことがあるよ。何かすごくいい人って感じがするなあ
- ・自分の事よりも他人のために努力している様子が伝わってくる
- ・まさしく「欲がない」というのが分かる生活だね
- ・宮沢賢治がこういう人だったのかな？それともこういう人になりたいという思いがあったのかな？理想みたいな感じ

②＜『注文の多い料理店』を読んだ感想を書こう＞

- | | | | |
|---|--|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・二人の紳士って、お金のことばかり考えている気がする ・こんな畏れに気が付かないなんて、紳士は馬鹿だよな | <ul style="list-style-type: none"> ・いつの間に不思議な世界に入り込んでしまったんだろう ・普通に考えれば山奥にレストランなんて変だね | <ul style="list-style-type: none"> ・扉を開けたら、どんどん猫に近づいていくね ・「サラダ」って書いてあるから、紳士はサラダになるのかな | <ul style="list-style-type: none"> ・何となく全体的に暗い感じがするんだよね ・『雨ニモマケズ』の雰囲気とはずいぶん違う感じがするなあ |
|---|--|---|--|
- ・『雨ニモマケズ』みたいに、描かれた時代が少し昔なのかな？
 - ・山猫は紳士を食べられなくて悔しがっているのかな？

○表記の見慣れなさや「デクノボー」など耳馴染みのない言葉が使われていて、読みづらさをもつ子どもがいることが予想される。時代背景を伝えたり言葉を確認したりして、詩に賢治の理想の生き方が投影されていることに気付けるようにする。

○子どもが第②時に、一層興味をもって臨めるように「宮沢賢治の作品をまた持ってくるね」と予告して第①時を終える。

○何に視点を置いて解釈をしているのかが視覚的に捉えられるよう【人物像】、物語の【展開】、ファンタジー作品の【構造】、【結末】などに分類して板書する。

③④＜感想を共有しよう＞

この二人の紳士って改めて読んでみると、すごく嫌な感じがするよね。何でもお金で解決してやるって感じがしているよ。	「風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。」が物語の最初と最後にあるね。	扉にある料理店からの注文によって、実は紳士たちが料理されていたんだから、びっくりしちゃうよね。	・この物語にもテーマがあるのかな。自然を壊すな！というテーマかな ・動物の方が偉いぞっていう感じ？
『注文の多い料理店』って、登場人物とか結末とかみんなそれぞれ考えたいポイントが違う物語だね。			

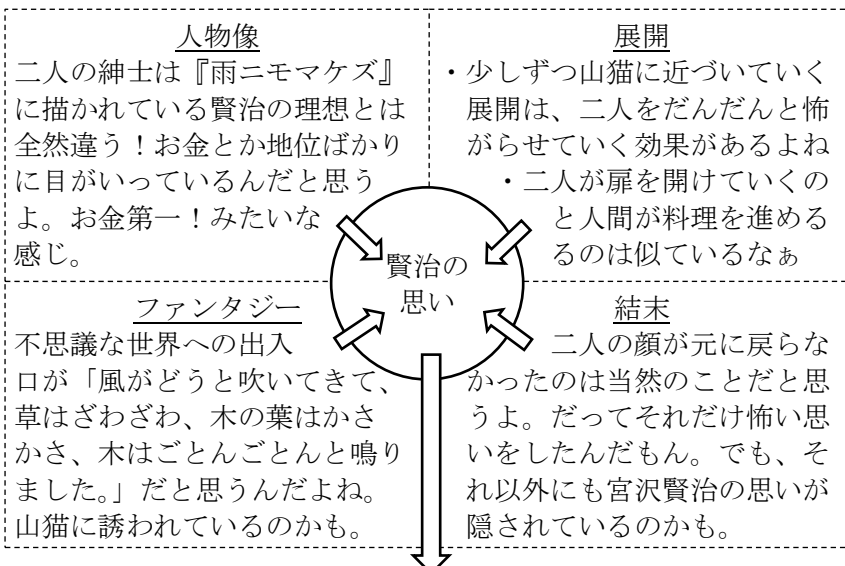
それぞれの追究テーマで『注文の多い料理店』を読み味わおう

お金持ちっぽい二人の紳士についてもっと人物像を考えたい。【*a】	いつから二人の紳士は不思議な世界に入っていたのかな？ 【*c】	どうして山猫はこんな回りくどい注文ばかりしたのかな？ 【*e】	東京に戻っても紳士の顔が元に戻らないのは何でだろう？ 【*g】
どうして二人の紳士は猫の餌に気付かなかったんだろ？ 【*b】	どうしてこの二人が山猫軒に迷い込んだのかな？ 【*d】	何で白い犬は二人の紳士を助けたんだろ？ 【*f】	最後、二人の紳士が食べられたらすっきりするのに…何で食べられなかった？ 【*h】

⑤⑥＜それぞれの追究テーマで『注文の多い料理店』を読み味わおう＞

よく考えたらおかしい注文ばかりなのに「貴族とちかづきになるかも知れないよ」とか言って、自分の都合のいい方にばかり考えているよね。 【*a, b】	そのまま紳士を捕まえて食べちゃえばいいのに、わざわざたくさん注文をして食べようとしているのは、意味がありそう。人間への仕返しかな。 【*b, e】
この二人の紳士は、たまたま不思議な世界に迷い込んだのかな。それとも、命を大切にしないという人物像が関係しているのかな…。 【*a, c, d】	猟犬に助けられたのはよかったけど、二人の顔が元に戻らなかったのは可哀想な気もするね。犬とか山猫とか自然を象徴しているのも関係しているかも。 【*f, g, h】

⑦（本時）＜追究を経て『注文の多い料理店』座談会をしよう＞



- 本單元では従来の精査解釈の授業というイメージではなく、それぞれの解釈を存分に交流をする「読書座談会」のイメージで単元を進めることを子どもと共有する。
- 子ども同士のつながりをコーディネートするために、解釈一覧表を活用する。
- 第⑤⑥時における個人追究の場面では、子どもが自分に合った学び方を選択できるよう、一人で追究したり学級の仲間と解釈を共有したりできる場を保障する。
- 誰がどのような追究テーマで読み進めているかという現在地を教師や子ども同士がつかむことができるように、追究テーマを色ごとに分類したカードを机上に配置する。
- 追究をしていく中で、子どもがもっと宮沢賢治について知りたいという思いをもつことも予想される。そのため『イーハトーヴの夢』等を準備しておき、その子の必要感に応じて手に取ることができるような環境を設定する。
- A 子は物語の【人物像】や【結末】に対して違和感をもつことが考えられる。そのため、『雨ニモマケズ』を想起したり『イーハトーヴの夢』での生き様を関連付けたりできるように声を掛ける。
- B 男は作品のテーマを「自然からの警告」と捉えるだろう。それと宮沢賢治の生き様を関連付けた解釈ができるように声を掛けたり、そのような解釈をしている友達を紹介したりする。
- 第⑦時の交流場面では、それぞれの追究から生まれた解釈に『注文の多い料理店』に込められた宮沢賢治の思いという重なりを見出せるよう、視覚支援として、ベン図等の思考ツールを用いて板書する。

⑧＜宮沢賢治は『注文の多い料理店』で何を伝えたかったのだろう＞

命の大切さだと思う。二人の紳士は猟犬が死んだときに、命をお金で表していたよね。でも、最後はその猟犬に助けられたんだから、お金の損得で判断しちゃダメ。	人間と自然が協力して生きることだと思う。紳士は人間の象徴で、山猫が自然の象徴だと思う。どちらかだけが得をしたり損をしたりするのではないということ。	人間は簡単には変わらないということだと思う。二人の紳士はあんなに怖い思いをしたのに、結局「十円だけ山鳥」を買って帰ったことが何よりの証拠。
--	---	---

- ・物語には作者の生き方や信念が入っていることが改めて分かった
- ・『雨ニモマケズ』には、ストレートに宮沢賢治の生き方が描かれていたけど『注文の多い料理店』は皮肉みたいな感じで描かれていた気がする

- ・賢治の理想とする人間の姿だと思う。見た目やお金のことばかりに目を向けるんじゃなくて、自然や命を大切にする事の価値を『注文の多い料理店』に込めたんだと思う。そして、宮沢賢治のように信念を大事にして生きる姿を自分も見習いたいな
- ・最初は「自然からの警告」だと思ったけど『雨ニモマケズ』とか他の作品を読んだら「自然と人間が共に生きる世界」って今は考えているよ。その作品だけじゃなくて、作者や他の作品も読み比べると、考えが変わっておもしろかったな

○子どもがたくさん解釈にふれることができるよう、ロイロノートの提出箱を活用する。

○文章でまとめることに難しさをいただく子どもがいるだろう。その場合には、キャッチコピーのような短い形式でまとめる方法もあるということ伝える。